

神の鳥に魅せられて



「月下に集う」(2020年2月撮影) ©高橋広平 表紙/「山と(Ⅲ)」(2019年8月撮影) ©高橋広平

高山に生きる鳥

ライチョウは長野、富山、岐阜の3県が県の鳥に指定し、国が特別天然記念物に定める鳥。山岳信仰の霊場だった高山地帯に生息します。霊鳥が転じて雷の鳥と呼ばれるようになったともいわれ、「神の鳥」と尊ばれてきました。

そのライチョウに魅せられ、季節を問わず山行を繰り返して、一途に撮り続けている写真家がいます。安曇野市を拠点に活動する高橋広平さんです。日本の山岳だけに住むライチョウをメインの被写体とする「雷鳥写真家」は、世界中で高橋さんただ一人。きっかけは2007年6月、北アルプスの登山道で経験した1羽のメスとの偶然の出会いでした。

それは高橋さんにとって劇的な「目惚れ」だったといえます。人を恐れる様子もなく、たたく姿の愛らしさに心を奪われたその瞬間を、高橋さんは今も鮮明に覚えています。その鳥がライチョウと知ったのは、下山して図鑑で調べてから。「彼らをもっと知りたい」との思いから、高橋さんは北アルプスの山中で暮らすようになります。彼らが生きる姿をカメラに収めたいと写真を独学。登山道をもまなく歩いて彼らが住む山の地形や植生を覚え、神秘といわれる生態を調べながら出会いのチャンスと作品を増やしていきました。

1980年代に国内で3000羽といわれていたライチョウは、現在2000羽弱まで減少したと推測されます。1700羽との説もあるほど減少は続いており、絶滅危惧種の指定も受けています。その理由の一つとみられるのが地球温暖化。氷河期の生き残りと考えられ、寒冷な山岳でのみ生き続けてきたライチョウにとって、温暖化の進行は生息できる環境が消えていくことを意味します。実際、北アルプスのライチョウ生息に適した環境が

今世紀末までにほぼ消滅するとの予測も発表されています*。また天敵の猛禽類やオコジョに加え、キツネ、カラス等が生息範囲を拡大して新たな天敵となったり、ニホンジカやニホンザルが高山に侵入してライチョウのエサとなる植物を採食してしまうといった事態もすでに起きています。さらには増加する登山者のゴミが、ライチョウを捕食する動物を引き寄せるとも考えられます。

夏は痛いほどの紫外線にさらされ、厳寒期には体感温度マイナス50度に凍え、時には深い雪に足を取られ、また時には身の危険を感じるほどの嵐に耐え、高橋さんは撮影を続けています。北アルプスの山頂に近い過酷な自然のなかで相手を見つけ、子育てをし、懸命に命をつなぐライチョウたちがいとしくてならないからです。しかし十数年にわたる撮影を通じ、彼らの生きる環境が悪化し続けていることに危機感を持っています。

「彼らがいなくなってしまうような未来には絶対にしたくない。そのために私にできるのは、彼らを撮り、発表し続け、一人でも多くの人に知ってもらおうこと。それが彼らを守ることにつながると信じ、山へ行き続けます」

高橋さんにとってライチョウは「永遠に片想いの相手」。会えたいうれしさを胸に秘め、決して彼らの領分を侵すことなく、静かにレンズを向け続けます。山岳の鮮やかな四季のなかで命を謳歌するライチョウたちは、時に凛々しく、時に微笑ましく、どこか人間的な表情を感じさせつつも、気高いほど野生。「神の鳥」の神秘さをまもって、画面の向こうから私たちに自然への親しみと敬意を思い出させてくれます。

*長野県環境保全研究所などのグループによる研究論文がBMC Ecology誌(2019年7月19日)に掲載された。

北アルプスのライチョウたち

山岳という特殊な環境で、太古から生き続けてきたライチョウ。その生態を観察、探求し、絶滅の危機から守ることは、永い生命の歴史を未来へつなぐとともに、大切な自然環境の変化に目を向け、多様な生物に支えられてきた私たちの暮らしを守ることにはなりません。

まだ謎が多いといわれるライチョウの生態ですが、13年にわたる撮影を通じ、高橋さんが観察し続けてきた北アルプスのライチョウの暮らしを少しのぞいてみましょう。



食

高山に自生するガンコウラン、コケモモなどの芽や葉、花、実などを、冬は主にダケカンバやオシラビンなど樹木の芽を採食します。



住

標高2,400m以上のハイマツ帯。登山道脇のハイマツの中や枝線（尾根）上、お花畑に姿を見せることも。繁殖期にオスがかまえる縄張りにメスが入り、つがい生活。基本的に一夫一妻。まれに一夫二妻になることも。ハイマツの中にメスが作った巣に5〜6個の卵を産卵します。メスが抱卵する間、オスは岩や木など高い場所で侵入者がいないか見張ります。ヒナが孵化するとつがい関係は解消されるとみられますが、翌年も同じつがいになることが多いようです。高橋さんがこれまでに見たつがいは毎年同じ雌雄。

衣 ライチョウの換羽は年3回
羽の色模様を巧みに変え、山岳の自然の中に紛れて身を守ります。

春から夏にかけて頭から背にかけてオスは黒褐色、メスは茶まだら。6月頃の繁殖期にはオスの目の上の肉冠が大きく鮮やかに。



春



夏



秋



冬

オス、メスともに暗褐色や灰褐色のまだら模様になり雌雄の識別が困難になるほどよく似た羽色に。ヒナは親鳥の大きさまで成長します。オス、メス、その年に生まれた若鳥が集まり、時には10羽以上の群れを形成します。

群れで暮らします。オス、メスとも尾の一部を残し純白に。オスはくちばしから目にかけて黒いのが特徴です。雪の洞を掘り、その中から顔をのぞかせる愛らしい様子も高橋さんは何度も目撃しています。

子どもたちに伝える ライチョウへのまなざし

高橋さんは自身の写真集『雷鳥』を長野県内の小中学校に贈っています。2019年から活動を始め、これまでに安曇野市、白馬村、長野市など17市町村に寄贈。「子どもたちがライチョウを知りファンになって身近な自然環境へ興味を持つきっかけにできれば」と話します。
『雷鳥』は1冊2,000円（税別）で販売中。
◆『雷鳥』の詳細・取扱店はHPで
<http://kouheitaakahashi.com/sale.html>



撮影：妻の恵子さん



雷鳥写真家
高橋 広平さん

1977年 北海道苫小牧市生まれ。
1998年 単身長野県に移住。
2006年 友人のすすめで登山を始め、翌年初めて出会ったライチョウに一目惚れし、写真を独学。山小屋に勤務しながらライチョウを撮り続ける。
2013年 第4回田淵行男賞賞状を受賞。
2017年より安曇野を拠点に「雷鳥写真家」として活動。年間30〜50日山岳に入りライチョウ撮影に臨むほか、環境イベントでのパネラー、講師としても活動。長野県自然保護レンジャー、ライチョウサポーター。
<http://kouheitaakahashi.com/>

ライチョウに会える博物館

市立大町山岳博物館

「山岳」をテーマに、地質、生物学、歴史・民俗、美術など幅広い分野の展示やイベントを行っています。環境省のプロジェクトと連携し、飼育繁殖技術の確立を目的にライチョウを飼育中。付属園では同種と孵化したライチョウを公開展示しています。3階からの北アルプス眺望も見どころです。

◆ライチョウ公開の日程はHPでご確認のうえお出かけください

<https://www.omachi-sanpaku.com/>

所在地／長野県大町市大町8056-1

入館／9時〜16時30分

休館／月曜・祝日の翌日（月曜が祝日の場合は開館）

料金／大人450円、高校生350円、小中学生200円

TEL 0261-22-0211



守る人を育てる

長野県「ライチョウサポーターズ」養成事業

国の天然記念物であり長野県の県鳥でありながら絶滅の危機に瀕しているライチョウの保護、回復に向け、長野県は環境省と連携し、さまざまな取り組みを進めています。その一つが長野県「ライチョウサポーターズ」養成事業。登山愛好者を中心に長野県や山岳を愛する500人近い人々が登録し、ライチョウ目撃情報の提供をはじめ各種保護活動をボランティアで実施しています。また長野県環境保全研究所が活動による収集データを分析。気候変動の影響を予測する画期的な学術論文を発表しています。

◆事業の詳細・サポーターズ申込みは長野県環境部自然保護課

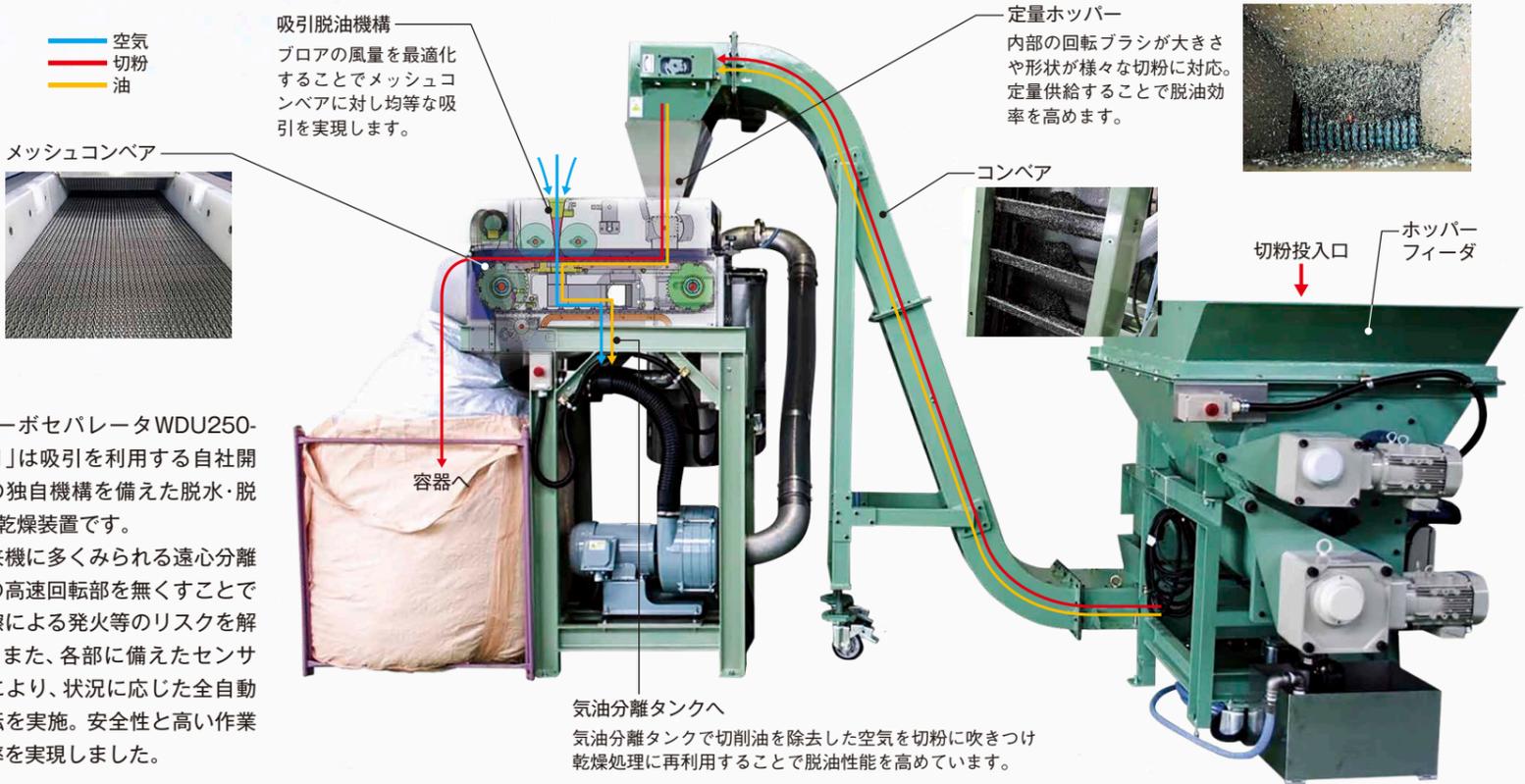
<https://www.pref.nagano.lg.jp/shizenhogo/kurashi/shizen/shizen/raityou.html>

ライチョウのエサとなる植物の生育を妨げるイネ科植物の除去活動／長野県自然保護課提供



製造現場の発火リスクをゼロへ

脱水・脱油・乾燥装置「ターボセパレータWDU250-001」



「ターボセパレータWDU250-001」は吸引を利用する自社開発の独自機構を備えた脱水・脱油・乾燥装置です。従来機に多くみられる遠心分離等の高速回転部を無くすることで摩擦による発火等のリスクを解消。また、各部に備えたセンサーにより、状況に応じた全自動運転を実施。安全性と高い作業効率を実現しました。

吸引脱油機構
ブローの風量を最適化することでメッシュコンベアに対し均等な吸引を実現します。

定量ホッパー
内部の回転ブラシが大きさや形状が様々な切粉に対応。定量供給することで脱油効率を高めます。

気油分離タンクへ
気油分離タンクで切削油を除去した空気を切粉に吹きつけ乾燥処理に再利用することで脱油性能を高めています。

こんなメリットがあります！

安全
空気のみで切粉と切削油を分離する吸引式の為、摩擦による発火等のリスクはありません。チタン等の火花金属も安全に脱油が可能です。

コスト削減
高い脱油性能により、これまで脱油に向きとされた金属についても脱油を実現、有価物としての売却も可能となり、廃棄物処理費用の削減に繋がります。また、分離した切削油についても、油種により生産工程での再利用が可能です。

作業効率
各種センサーで常時モニタリングを行い、ホッパーフィーダに切粉を投入後は脱油から機器の洗浄・メンテナンスまで自動運転を実施します。また、自由度の高い設計の為、現場のスペースを最大限に利用した高効率な作業レイアウトも実現します。

対象となるお客様

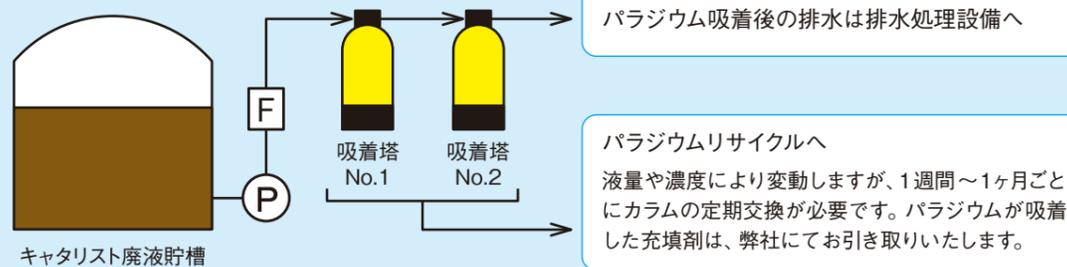
石油・石炭製品製造業、食料品製造業、鉄鋼業、繊維工業、化学工業、精密機械器具

オンサイトでのパラジウム回収

プリント回路基板等のめっき工程で排出されるキャタリスト廃液からパラジウムを回収します。特殊吸着剤が充填されたカラムに通液するだけでパラジウムを選択的に吸着。これを用いることで100%近いパラジウム回収率を実現し、リサイクル率も高めます。また、設置場所に合わせた設計のため、お客様事業施設の空きスペースを有効利用できます。回収したパラジウムの買取もミヤマにお任せください。



■フロー図(例)



パラジウム回収装置



特殊吸着剤